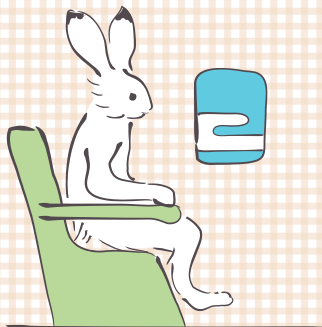
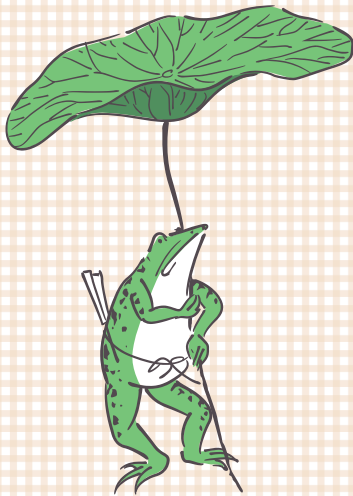




ふおーらむ

第14号



目次

巻頭特集

第19回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式……………2

挨拶：山崎久道氏

表彰講評：水谷長志氏

受賞者挨拶

銀鱗文庫 粟竹俊夫氏

銀鱗文庫 福地享子氏

洪沢栄一記念財団 情報資源センター 茂原暢氏

雪嶋宏一氏

渡辺美好氏

文集

山内明子「俳句八句」……………15

大村英正「川柳・自由吟（雑吟）」……………16

菊池佑「素人から専門家への道：

患者図書館の制度化に向けての小児図書館運動40周年」……17

古賀節子「ライブラリアンとピアニスト

甲斐美和子さんと藤田晴子さんの足跡を辿って」……………20

末吉哲郎「輝かしい20年目の表彰へー図書館利用の輪を広げよう」…24

平井紀子「6歳の思い出ー恐山のイタコー」……………25

山崎久道「二匹の犬の物語」……………28

水谷長志「改稿 図書館の風景、読書の姿」……………30

編集後記

第19回図書館サポートフォーラム賞授賞式

於／2017年4月17日(月)

喜山倶楽部光琳の間(日本教育会館内9階)

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポートフォーラム代表幹事)

図書館サポートフォーラムの代表幹事を仰せつかっております山崎久道でございます。

図書館サポートフォーラム賞も今回19回目を迎えることになりました。

この賞は、本日会場にいられています初代の代表幹事である末吉哲郎さんのご発案で始められた賞として、次の3つの精神を柱にしています。

1つ目は、図書館において、非常に地道な活動や専門性を発揮されてきた図書館員、アーキビストや学芸員の方々、あるいは組織の成果を表彰させていただくということが、第一のポイントとなっています。

2つ目は、図書館はとかく日本の社会におい

ては必ずしも日の当たる存在になっていないという現状があります。これは文化国家としては大変残念なことではありますが、現状はそういう状況でして、このことに対して政治家、財界やその他各界の理解が十分とはいえない部分があります。そこで図書館の社会的意義に関わる活動をされていたり、あるいはその価値を世間に広く知らしめることに貢献されている方を表彰させていただくというのが、第二のポイントとなっています。

3つ目は、国際的な文脈で図書館をとらえると言いますか、例えば途上国の図書館支援をするとか、あるいは途上国の子どもたちへの読書運動を行ってきた若い女性を表彰したことなどもございます。そういった国際的な図書館に関わる活動に従事されたり、あるいは読者への支援や交流活動などに貢献された方を表彰させていただくというのが、第三のポイントとなっています。

大体この専門性、社会的意義、国際貢献といった三つを柱にして、表彰活動を行っております。図書館サポートフォーラム自身が、図書館でかつて働いていて、そしてOBとなった今もなお図書館に情熱を持って、日本の図書館全体を良くしていこうという情熱に溢れた方達を中心になってボランティアに運営している団体でございます。そこで毎回こういった形で図書館サポートフォーラム賞を差し上げることになっているわけです。

今年も私共で審議・厳選いたしました、4組の大変素晴らしい授賞者の方々をお迎えすることができました。実際には団体が二つ、個人がお二方となっています。いずれも素晴らしく大変な業績を挙げられて、図書館というものの価値を広く社会の中で位置づけた上で、後世に残るような活動になっているという点では一致しています。

表彰選考の詳細についてはこの後表彰委員長よりご報告がありますので、私からは省略させていただきます。

どうもありがとうございました。

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポーターフォーラムの表彰委員長をしております東京国立近代美術館の水谷と申します。よろしくお願いたします。

早速ですが、第19回図書館サポーターフォーラム賞の表彰結果について、ご報告いたします。今回は、図書館サポーターフォーラムの会員および事務局より、個人6名、団体5件、11件の表彰候補が推薦されました。

この数は昨年の11件と同数ですが、団体が結果として、昨年より1件多い候補の数となりました。実のところを言えば、推薦者は個人を推しての推薦であり、そして入選でありましたが、ご本人への受賞の確認において、個人での受賞は固く辞され、団体での受賞をご希望なられました。そのご意向を踏まえまして、事務局、代表、表彰委員長による選考会後の検討を引き続いて行い、その結果をもちまして、今回の表彰のことをお伝えしたいと存じます。

今年もまた、受賞の個人、団体は、図書館員および図書館の外から図書館をサポートされ、図書館活動を推進するお仕事をされていて、いずれも高い業績と評価をすでにお持ちの方々で

ありました。

選考は3月14日、大森の日外アソシエーツにおいて8名の出席幹事による投票および6名の不在幹事の通信投票によることとなりました。いささか不在幹事の多いことが残念でしたが、出席・不在のあわせて14名の幹事による投票が行われました。昨年にも増して投票の結果は拮抗しました。厳正かつ公正な選考経過の結果として、同数票を得た候補もあり、例年よりも1件多い4件で着落したのであります。すなわち、この度の第19回図書館サポーターフォーラム賞は、銀鱗文庫様、公益財団法人渋沢栄一記念財団情報資源センター様、雪嶋宏一様、渡辺美好様の二団体と個人お二人様が受賞されることになりました。

では、五十音の順に第19回図書館サポーターフォーラム賞の表彰理由について述べさせていただきます。

まず最初に団体表彰として銀鱗文庫様の表彰理由を読み上げます。

○銀鱗文庫

銀鱗文庫は東京都中央卸売市場「築地市場」の水産仲卸の文化団体「NPO法人築地魚市場銀鱗会」の前身、一九五一年に誕生した「築地魚市場銀鱗会」が創立10周年の記念事業として開

館、5年前から一般への閲覧も始めた。当初は、市場の人の余暇や教養を高めるための図書が中心だったが、二〇一〇年より、市場ならではの専門的な図書館に方向転換。水産の統計や年鑑ほかの専門書、日本橋魚河岸や築地市場開場時などの印刷物など、「築地市場の存在証明」に類する資料収集にも精力を傾けており、平成28年度は、一九五〇年代に始まる業界新聞のデジタル化を進めて、築地文化を未来へつなぐ活動を行っている。こうした資料を目的に、水産関係者のみならず、大学生ほか多くの研究者が訪れており、この貴重な文庫を生き残らせることもまた日本の、東京の文化指標を示すものであると言えるだろう。このユニークな公開専門図書館である「銀鱗文庫」の事業は、まさに図書館サポーターフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

この2月、私がリスボンへ出張した帰り、パリのシャルル・ドゴール空港で乗り換えて、エア・フランス便で羽田に帰りました。12時間近いフライトはやはり応えるのですが、邦画の「シン・ゴジラ」や「君の名は」もありました。目が覚めた瞬間、機内ですでに観たものであり、眼先をかえてドキュメンタリーを選びました。ところ、「TSUKIJI WONDERLAND」という松竹制作のビデオがありました。築地か豊洲

かで注目されておりましたし、図書館サポートフォーラムの見学会もあり、そしてこの賞の候補にも銀鱗文庫が挙がっていたので、これ幸いと観ておりましたら、銀鱗文庫の看板がまさに映し出されました。

ハーバード大学の社会文化人類学者のベスター教授が銀鱗会事務局長の福地享子様と一緒に文庫の中で調べ物をしたり、お話しする様子が流れました。ベスター教授は、「Tsukiji: The Fish Market at the Center of the World (California Studies in Food and Culture, 11) をカリフォルニア大学出版会から二〇〇三年に出されており、翻訳書も木楽舎から二〇〇七年に出ています。福地様ご自身も、銀鱗会と共著で『築地市場 クロニクル 10032016』（朝日新聞出版）を昨年出版なされていますが、このように研究者からも絶大な信頼を得ている銀鱗文庫が築地に留まるにしろ、豊洲に移るにしても、着実に継承されることを願いたいと存じます。

次いで、同じく団体表彰の公益財団法人渋沢栄一記念財団情報資源センターの表彰理由を読み上げます。

○公益財団法人渋沢栄一記念財団

情報資源センター

公益財団法人渋沢栄一記念財団情報資源センターは、昨年（二〇一六年）二月一日、『渋沢栄一伝記資料』全68巻のデジタル化プロジェクトにおいて、本編58巻のうち索引巻である第58巻を除く57巻、約4万ページをインターネットへ公開した。本伝記資料が日本近代史、経済史研究に資することは言うまでもないが、本資料の公開に当たって仕込まれた、データ構成、検索システム、ユーザー・インタラクションなどの多面的で周到かつ、合理・合理的な設計は、数多あるデジタルアーカイブの中でも秀逸さにおいて際立っている。以後の史資料の公開に際して、モデルとなる事例を構築された貴センターの本事業は、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

表彰理由の通り、今回の表彰は単に大部多巻もののデジタル化とその公開にあるのではなく、検索のインターフェース等に周到な配慮がなされていることを高く評価してのことです。渋沢栄一記念財団情報資源センターのサイトには、渋沢栄一資料に留まることなく、今から列挙いたします9つのジャンルがあります。すなわち渋沢栄一情報の発信（ここに伝記資料があります）、渋沢社史データベース、世界／日本のビジネス・アーカイブズ、ビジネス・

アーカイブズ通信（BA通信）、実業史錦絵プロジェクト、協力事業、情報資源センターだより、情報資源センター・ブログ、実業史研究情報センターの誕生、というように。よくまあ、これだけのコンテンツを揃え、かつダイナミックなスピードで更新されるものだといつも感心しております。

それだけでも大変なのに、センター長の茂原暢さんは、「きまぐれニュース」という専門図書館のメーリングリストを設置し、週末を除くほぼ毎日、MLA界のさまざまなニュースをタイトルとURLと茂原さんのコメント付きでメール配信して下さって、私の職場の朝はこのメールをチェックすることから始まるのが多いのです。あんまり頑張り過ぎて倒れないよう、健康管理にはお気をつけて下さい。ついでに言うとうと茂原さんは、くにたちバロックアンサンブルの首席常任指揮者でもあり、そちらで発散されているのかもしれない。

次いで、個人表彰の雪嶋宏一様の表彰理由を読み上げます。

○雪嶋宏一

（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

雪嶋宏一氏は一九七八年に早稲田大学に司書

職として入職後、深井人詩氏の薫陶のもと、一九九五年の『本邦所在インキユナブラ目録』(III)を皮切りに、西洋書誌学、とりわけ揺籃期本について全国調査に基づいて研究を推し進め、日本における西洋書誌学のレベルを大きく向上させた。教職に転じた後は、16世紀印刷本にフィールドを広げ、ヴェネツィア印刷界の巨人アルド・マヌーツィオ、『万有書誌』のコンラート・ゲスナーなど書物史に登場する巨匠的人物の研究においても多彩な業績を築かれている。揺籃期本については、二〇〇四年にJILを改訂増補するIncunabula in Japanese

libraries(JIL2)を刊行している。これらの一連の研究は、日本の学術図書館における西洋貴重書の保存と継承に多大の功績をもたらすものであり、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

雪嶋宏一先生は早稲田大学の第一文学部でもともと古代遊牧民スキタイの歴史と考古学を学ばれ、『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』という本も二〇〇八年に雄山閣から出されています。早稲田大学の図書館でのお仕事のスタート時は、深井人詩さん(第3回LSF賞受賞)が直属の上司であったということで、かつて日外アソシエーツが出版元であった日本索引家協会の『書誌索引展望』に連載の藤野幸雄先生(故人・第11回LSF賞受賞)の「書誌索引家列伝」にインスパイアされて、アンリ・コルディエなどについて、同じ連載に寄稿されました。その手法をもってインキユナブラの書誌の歴史をまとめられたと以前に書かれております。このような機縁・奇縁があったのもまた、図書館サポートフォーラム賞に相応しいお方と存じます。

ついでながら言いますけれども、日外アソシエーツが発行元になっていた日本索引家協会の『書誌索引展望』は、一九九七年に終刊いたしました。が、やはり惜しい雑誌を失ったという感慨があります。その一部は昨年のサポートフォーラム賞の金沢文圃閣が引き継いでいるようでもありますが、書誌と索引の理論誌としての『書誌索引展望』は、私にとりましても大切な一誌でしたので、やはり残念です。

私は、個人的には、近年の「萬有(世界)書誌」のコンラート・ゲスナー、ヴェネツィア印刷人のアルド・マヌーツィオについてのご研究の成果に多くを学ばせて頂いております。特にアルドの没後五百年の記念展覧会をヴェネツィアのアカデミア美術館で見る機会を得たのも、雪嶋先生の研究を追っていたからでございます。最近では、『日仏図書館情報研究』にアルドについての講演録が掲載されていますので、ご興味の方は是非ご覧いただくのが良いかと思えます。

次いで、同じく個人表彰の渡辺美好様の表彰理由を読み上げます。

○渡辺美好(元国士館大学図書館職員・元同大学非常勤講師)

図書館サポートフォーラム賞の受賞者の中には、これまで図書館員でありつつ書誌作成に本務以外の個人の時間を傾注して止まないbibliographer、書誌の人は少なくない。18回の手代木俊一氏はキリスト教礼拝音楽の、16回の太田泰弘氏は食文化の主題書誌において、14回の金沢幾子氏は福田徳三の、11回の大森一彦氏は寺田寅彦の個人書誌についての功績を評価してのものであったが、今回の渡辺美好氏も吉田松陰書誌に代表される個人書誌において大きな成果を挙げられた。特に個人書誌を「データによる伝記」と捉え、対象人物像に迫り、その人間観、歴史観の理解を促す創意工夫のある書誌の作成は、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

渡辺さんは『深井人詩書誌選集』を「1年譜・著作目録」二〇一四年、「II 二次書誌・三次書誌」、「III 書誌作成論」、「IV 文献探索

人・書評・師友・家郷」の三冊とも二〇一五年に、いずれも金沢文圃閣から出されておりました、雪嶋先生同様に深井人脈に連なる方と云えます。深井書誌のIも吉田松陰書誌同様に、渡辺流「データによる伝記」としての個人書誌と伺っていますが、ほかに杉森久英、中村洋子、草野正名、深井迪子についてもこの「データによる伝記」を編まれていることです。その一例としての深井迪子書誌について、渡辺さんは、「深井迪子は戦後の新世代を代表する作家であった。年譜では創作の苦労や作家としての悩みや関心の変異などを、彼女の著作や日記・書簡などから詳述した。引用文には出典を明示。『未発表ながら』参考文献目録では批評文の要所をいちいち摘録して付記したので、作品に対する評価をこの目録で瞥見できる」とお書きです。書誌を編むことの労力はただでさえ大きい上に、このような「伝記的書誌」ははるかに想像を越えるものがあるでしょう。

第19回を迎える図書館サポートフォーラム賞も、この賞の三つの柱にかなって、長年の研鑽と国際性、そして図書館のあることの意義の発露顕現をよく示すお二方と二機関に受賞いただきました。今回、例年になく4件の受賞者を得ましたこと、表彰委員長として、ことのほか嬉しく思っております。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポートフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

3. 受賞者挨拶

銀鱗文庫

〔築地魚市場銀鱗会〕理事長・

栗竹俊夫氏

ご紹介いただきました「銀鱗文庫」を運営するNPO法人築地魚市場銀鱗会で理事長を務めております栗竹俊夫です。

本日は、銀鱗文庫が図書館サポートフォーラム賞を頂いたとことで、非常に特異な場所です市場及び水産について真摯に取り組んできたことが評価されたことを本当に嬉しく、榮譽あることと今、心に留めております。ありがとうございます。

「銀鱗文庫」は、築地市場の中で会員相互の



親睦を図ると共に市場問題等の研究を目的に1951年に創立された「築地魚市場銀鱗会」が、創立10周年の記念事業として創設した図書館です。当初は水産仲卸組合の図書の整理・保管を目的としていましたが、創立20周年を機に全市場人に公開。市場で働く人に蔵書の貸し出しを始め、2000年を迎えたころには蔵書数6,000冊を超え、全国に珍しい「市場の図書館」として、新聞や雑誌などで紹介もしていただきました。

その中で、2008年、本が余暇の娯楽として読まれる時代は過ぎたと判断し、水産及び築地市場の資料に特化した資料室の転換を考え、市場内外に市場に関連する品・資料等の寄贈の呼び掛けを始めました。現在では、水産・市場関係の書籍だけではなく、日本橋時代からの鑑札類や売買契約書など写真のほか歴史資料も保管し、図書館を兼ねた資料室の役割も兼ねていると自負しております。是非皆様には一度足をお運びいただきたいと存じますので、どうぞ宜しくお願い致します。

そして、もう一つ。私が是非皆様にお伝えたいことがあります。

魚食離れが進んでいると言われるようになってから久しいですが、私たち日本人は魚食文化として古くから魚に親しんできました。それは、日本の周りは海に囲まれ、魚や鉱物資源を含め

た水産資源の宝庫であるからです。漁業における国からの補助金の在り方等様々な問題はありますが、DHA摂取の為にサプリメントを飲むのではなく、是非青魚を食べて頂きたい、美味しいお魚をたくさん食べて知って頂きたいと思

本日はありがとうございました。

「銀鱗文庫」お守役よりひとこと

〔築地魚市場銀鱗会〕事務局長・

福地享子氏

「銀鱗文庫」お守役の福地享子です。文庫を運営しているNPO法人築地魚市場銀鱗会の事務局長という肩書はお飾りで、実は、文庫をベースに、お茶くみから会費集め、掃除に取材の応対、イベント手配と、要するになんでも屋の雑用係。その主たる仕事が、というより、自分で大切に思っているのが、文庫の資料をお守りすることです。

銀鱗文庫を知ったのは、1998年、築地市場に通い始めてのころ。まだ水産仲卸で売り子をやっていました。当時は築地市場の歴史を調べるためにずいぶんと神田の古本屋さんを回っていましたが、読みたいと思う本のほとんどが

そろっており、狂喜乱舞（ちよっと大げさ）したものです。それからずっと入り浸りっぱなしでした。

ところが10年近くたって、文庫に常勤でいた事務所の女性がやめてしまい、部屋は銀鱗会の役員がたまの息抜きに使う場となりました。いつ行っても鍵がかかったままで、私の足は遠のきました。たまたまあるとき、文庫の中に入る機会がありました。部屋のしつらえは、数か月前と変わっていないのに、ドアを開けた瞬間の、いつもの輝きがありませんでした。机の上のホコリがやたら目につき、空気は淀み、ドキドキしながら手に取った本はつまらないものにも思われ、窓から射し込む陽光もなんだか白々しい。部屋の片隅には酒瓶がころがり、隣の部屋は天井までゴミで埋まっていました。

それからしばらくして銀鱗会の役員会があり、文庫をどうするかの話し合いとなりました。「私、事務の仕事、やります」と、手を挙げました。場の勢いってやつですね。なにしろ文庫の本は東卸（水産仲卸の組合）に渡して、銀鱗会は身軽になるう、という意見まで飛び出し、手をあげるしかなかったのです。

言ってからちょっと後悔しましたが、私の人生、場の勢いでつなげてきたようなもの。イヤだったら、逃げだせばいい、くらいの気持ちで受けました。

まず、私のやるべき、というか、私のためにやるべきことは、文庫の大改造です。ドアを開けて真正面に居座っていた冷蔵庫を隣室に移動し、給湯器の周囲に散乱した調理道具を片付け、ここでのプチ宴会は御法度に。戸棚の奥にある雑物、歯ブラシに着替え、空き缶と意味不明なものはすべて処分。隣室の片付けも何日かかったやら。

掃除が苦手な私が、一生懸命やったのは、実はすごいおまけが隠されていたのです。それが、今、銀鱗会のお宝資料となっている日本橋魚河岸時代から築地市場開場前の印刷物です。あちこちの棚の奥から、また一枚、あらここにも、と出てきたのです。茶色に変色した紙きれは、関心のない人ならおそらく捨てる代物です。無事に見つかってよかった、という嬉しさの前に、苦手なこと帳消しとなりました。

結局、そのまま、ここに文庫のお守役として残ったのは、アーカイブス資料が好きだし、さらにもっと掘り起こしたいという欲張り根性が働いたためです。個人での資料収集には限りがありますが、銀鱗文庫が背景にあれば、より多くの方に声をかけることができます。

市場という場所は、明日の魚を売ることが生業ですから、後ろを見ない体質の人が多く、アーカイブス資料には関心が薄いのは確かですが、それでも根気よく続けていると、思わぬお宝に



巡り合えます。先日は、大正から昭和にかけて仲買をやっていたという方から、当時の荷札、印鑑、鑑札などまとめて寄贈してもらいました。こういうことがあると、給料8万円という薄給ブルーも吹き飛びます。

公益財団法人渋沢栄一記念財団

情報資源センター

(センター長・茂原暢氏)

公益財団法人渋沢栄一記念財団、情報資源センター長の茂原でございます。

この度は栄えある図書館サポートフォーラム賞を情報資源センターにお授け頂き、誠にありがとうございます。

特に、『渋沢栄一伝記資料』全68巻のデジタル化プロジェクトについて、その公開だけではなく、検索システムのようなバックグラウンドにも同等の重きを置き、ご高評をいただいたことは、私たちの大きな喜びであります。と申しますのは、デジタル版『渋沢栄一伝記資料』の公開に至るまで、実に12年もの作業が必要だったからです。



世に言うデジタルアーカイブの多くは、「画像を見るためにメタデータを持たせたデータベース」です。一方で、デジタル版『伝記資料』は、インターネットを通じて書籍の版面を「ページ画像」として読むことが出来るとはいえ、全文検索を行うための40,000ページ分のテキストの塊が主体となっています。昨年「第一弾」として公開した57巻分の文字数は約4,000万字となっており、その作成には非常に多くの労力が必要でした。また、『伝記資料』本編における「項目名▽網文▽引用資料」という構造を再構築するためのデータ整備、ネット公開を行うためのサーバーの調達・システムの構築、そして何より著作権に関わる情報の調査と整理など、膨大な量の作業を行うための時間が必要でした。

またプロジェクトの長期化が見込まれる中で、情報資源センターでは、デジタル版公開のはるか以前より、『伝記資料』のテキストを使いブログ・エントリを作成して誰でも使えるリソースを提供する、財団内検索システムを作って内部的な研究支援を行う、時には配付資料のデジタルリソース一覧にあるようなスピンアウト・コンテンツを作成するなど、成果物を出し続けることで事業の継続性を確保してまいりました。

今回の表彰理由には「以後の史資料の公開に

際して、モデルとなる事例を構築」とありますが、洪沢栄一情報資源の発信だけではなく、情報資源センターの事業そのものに社会を豊かにするための価値があると認めていただいたことで、これまでのやり方は間違いではなかったと、あらためて確信を持った次第です。

情報資源センターの役割は、この社会をより善いものとするため、洪沢栄一の経験や考え方に誰でもアクセスできるように、「洪沢栄一を社会の中に埋め込むこと」、そして「埋め込むための器を作ること」です。そして、その実現のため、我々には「文化資源を作り出す」「ウェブサイトが閲覧室」というふたつのモットーがあります。私たちはこれらの役割を果たすために、社史の中に書かれている情報にアクセスするための「洪沢社史データベース」、錦絵の中から実業史に関する情報を抽出する「実業史錦絵索引」、混沌とする社会に対して、道徳と経済の一致する場として実効性のあるモデルを提示するビジネス・アーカイブズ関連事業などを進めてまいりました。その中で栄一の業績を記録した『伝記資料』をデジタル化するプロジェクトは、情報資源センターのみならず洪沢栄一記念財団全体が持つさまざまな文化資源を「公共財化」する際に根幹となる事業です。

今後は、著作権処理を行い本編の公開範囲を増やす、残る別巻を公開する、そして財団内外

のリソースを集約することで社会とのつながりを深め、関連する文化資源、あるいは社会そのものをさらに豊かにすることを目標に事業を進めてゆきたいと思っています。

最後になりましたが、今回ご推薦をいただきました先生方をはじめ、これまでにご支援・ご協力をいただいた皆様に、あらためて御礼申し上げます。また、洪沢栄一を社会の中に埋め込むと同時に、埋め込むための器も作ってきた情報資源センターのスタッフひとりひとりの長期にわたる努力と苦勞に思いをはせ、この御挨拶を終えたいと思います。

今後とも、ご指導・ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

雪嶋宏一氏

(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

この度はかくも栄誉ある賞をいただきましたこと関係者の皆様方に大変感謝申し上げます。私の受賞理由は日本国内におけるインキュナブラの調査研究と西洋書誌学の発展に対するものですが、これまで30年近く、人生のほぼ半分の期間にわたって人知れず片隅で続けてきたので、このような賞の受賞対象になるなど夢にも思っておりませんでした。本当にびっくりし



ている次第です。

私がインキュナブラの調査を行おうと考えたのは、1957年の天野敬太郎氏による調査、1964〜66年の天理図書館の富永牧太氏の調査があったからでした。両調査ともにアンケート調査であり、現物調査ではありませんでした。そのため、調査報告にはおかしな点もいくつか見られました。富永氏以来20年以上誰も調査していなかったのですが、その間に日本には少なからずインキュナブラが入っていました。特にバブル期には名だたるインキュナブラが続々と古書展示会に出品され、国内の図書館に収蔵されていきました。さらには、丸善がグーテンベルク聖書を落札した頃です。全国所在調査をすれば以前の調査の何倍ものインキュナブラの存在がわかるはずだと思っただけです。また、海外からは日本に入った貴重な資料がどこに行っただか分からないし、日本はそのような情報を国外に出さないと批判されていました。それでは全国調査をして所蔵情報を海外に発信しようと考えたものでした。一方、インキュナブラの研究は書物の考古学とも言われています。私は学生時代より黒海周辺の古代史と考古学を勉強しておりましたので、それは私にぴったりだとも思い当たったのでした。

こうして、インキュナブラの調査を始めるにあたり、私に書誌作成方法を教えてくださった

深井人詩先生に相談しました。私は当初、以前のようにアンケート調査でよいのではないかと思っていました。深井先生は「誰がインキュナブラのことも知っているのか、あなたが自分で現物調査をしなさい」と言われました。私は背中を押されたと思いました。それ以来今に至るまで国内のインキュナブラを調べ続けることになったのです。深井先生には感謝するばかりです。

1988年に早稲田大学図書館所蔵のインキュナブラを調査したのを皮切りにして、以前の調査に収録された所蔵先を手掛かりにして、慶應義塾図書館、天理図書館等を訪問して1点1点現物と向かい合せて調査を行いました。そして、早稲田大学職員の海外研修で1989年7月から8か月ほど英国図書館をはじめヨーロッパの大図書館を訪問してインキュナブラと西洋書誌学について勉強させていただきました。特に、英国図書館ではインキュナブラの世界的データベースを構築していたISTC (Incunabula Short Title Catalogue) 調査室にお世話になり、ISTCの書誌データの自由な利用を認めていただきました。

帰国後には日本国内の所蔵を知るために雄松堂書店と丸善から多くの情報を提供して頂きました。それに基づいて調査に向かいました。私立大学図書館協会と町田市立国際版画美術館か

ら研究助成金をいただいて調査を続け、その調査結果として1995年に『本邦所在インキュナブラ総合目録(Ⅱ)』を雄松堂出版から出版させていただきました。

しかし、これで終わりではなく、出版後も国内にはまだ調査が及んでいないインキュナブラがたくさんあることがわかりましたし、国内に続々と入ってきておりましたので、調査を継続し、さらに私立大学図書館協会からも研究助成金を再度いただきまして、2004年に改訂増補版として『Incunabula in Japanese Libraries (Ⅱ)』を英語版で雄松堂出版から上梓させていただきました。その後も調査を続けております。現在国内に550コピー以上のインキュナブラが所蔵されていることがわかっています。その結果として第3版を刊行する予定にしております。

このようなインキュナブラ調査の傍ら、明治大学リバティ・アカデミーで西洋書誌学の講座「西洋古版本の手ほどき」を2003年度に開設することになり、以来12年間、図書館員や製本家、書店や出版社、印刷会社の人たち等の社会人に向けて西洋書誌学の授業を続けました。その間に100回以上講義を行いました。一度も同じ話にせずに変化をつけて15世紀から18世紀までの書物の話をしましたので、私自身大変勉強させていただきましたし、たくさんの仲

間を得ることができました。今は名前を変えて早稲田大学で講座を継続しております。明治大学と講座の受講者の皆様には感謝するばかりです。

これまで誰にも注目されなかつたような私のおさやかな調査に対してこのような栄えある賞をいただきましたことが、日本で西洋書誌学を目指す若い人の励みになり、今後の西洋書誌学の発展につながれば誠に幸いであると思っております。

本日は本当にありがとうございます。謹んで御礼申し上げます。

渡辺美好氏

(元国士館大学図書館職員・

元同大学非常勤講師)

只今ご紹介を頂きました渡辺でございます。

この度は図書館サポートフォーラム賞を賜り、誠にありがとうございます。これと言った業績がある訳ではありませんので、賞に値するか否か、甚だこそばゆく感じております。

何かを調べようとしますと、私達は取りあえず、書誌を使って関係文献を集めます。ですから書誌の利用は、研究の初期段階であると言えます。初期段階で時間が掛かったり、つまずいたりしてはいけませんので、書誌は利用しやすい

く、求める文献がたやすく発見できねばならないと思います。

私は、六人の方の個人書誌を作成しました。書誌の作成を開始して数年間は、文献を集めることに夢中でありましたが、文献が集まって来て、さて書誌を利用する側に立ってみますと、従来の遣り方に疑問が湧いて参りました。

それまでに出版された個人書誌の構成は、文献を図書や雑誌記事、新聞記事などの媒体別に分けたうえ、文献の刊行年月順に並べておりました。これでは読みたい文献は中々見つからないのではないかと、思ったのであります。

個人書誌は元々人物を知るためのツールでありますから、その人の業績や人物像が見出せるように、文献を配置すべきであります。

そこで私は、「個人書誌はデータによる伝記である」と言えるように、全体を構成すれば、使いやすいツールになると考えたのであります。

伝記は通常、特定人物の事実をしらべ、想像や推察を交えながら文章で記載をします。しかし書誌は、正確さが第一でありますから、想像をすべて排除したうえで、データだけを頼りに当該人物の業績や人物像を表現するのであります。

例えば杉森久英の場合、彼は作家でありますから、小説や伝記、随筆や俳句、書評などに分



けて配列をしたうえ、文献一点一点に対し文献番号を与えました。

作家の方はご自分の作品を度々修正されますので、この文献番号で作品同士を連結させますと、修正した過程を知ることが出来ます。また参考文献と連結させますと、作品の評価を比較・検討することが出来ます。ご本人が第三者と論争していた場合は、論争の発端から終結までを、確認出来るのであります。

吉田松陰の場合ですが、彼には立派な全集がありますので、著作目録を作成する必要はありません。そこで、第三者の書いた参考文献を集めて、書誌を作成しました。松陰には、尊王愛国者とか、革命家・教育者、ヒューマニストと言った印象がありますので、文献を件名順に配列することにしました。「思想と学芸」「日本人と松陰」「文芸作品」「研究案内」など、三十六の項目に分類して、研究のための新たなアプローチの視点を提示しました。また文献探索の焦点を絞り込んだため、研究活動の中でこれまでに多くを占めていた資料調査の時間が、縮小できたと思います。

従来、書誌作成は地味で、根気を要する仕事である、と言われて来ました。その個人書誌が、作成者のつかんだ当該人物の全体像や、イメージを表現する場所ということになれば、書誌を作ることは面白く、遣り甲斐のある仕事に

変わってくると思います。

書誌記述の一部である、注記の役割についてありますが、注記はこれまで、文献の内容細目や図書の形態を詳しく記載するときに使われまして、言わば形式面の利用に留まっています。要するに文献を利用するための注意や、予備知識を提供する場所では無かったのであります。

ところで書誌の作成者は、五年、十年、あるいはそれ以上の長期間、関係文献に触れておりますので、その人物に関する様々な情報に接する機会が沢山あります。

たとえば杉道助の書いた吉田松陰に関する文献があつたとしても、何の注意も引かないかも知れません。しかし杉道助が、松陰と仲の良かった兄梅太郎の孫と判れば、事情が変わって参ります。

梅太郎が明治四十三年、八十三歳で亡くなった時、道助は二十六歳の青年になっておりましたので、梅太郎から松陰の想い出をしっかりと聴いていた、と思われます。

杉道助は大阪商工会議所の会頭であり、関西の財界をリードした立派な人物でありましたので、彼の証言は十分傾聴に値すると思われます。

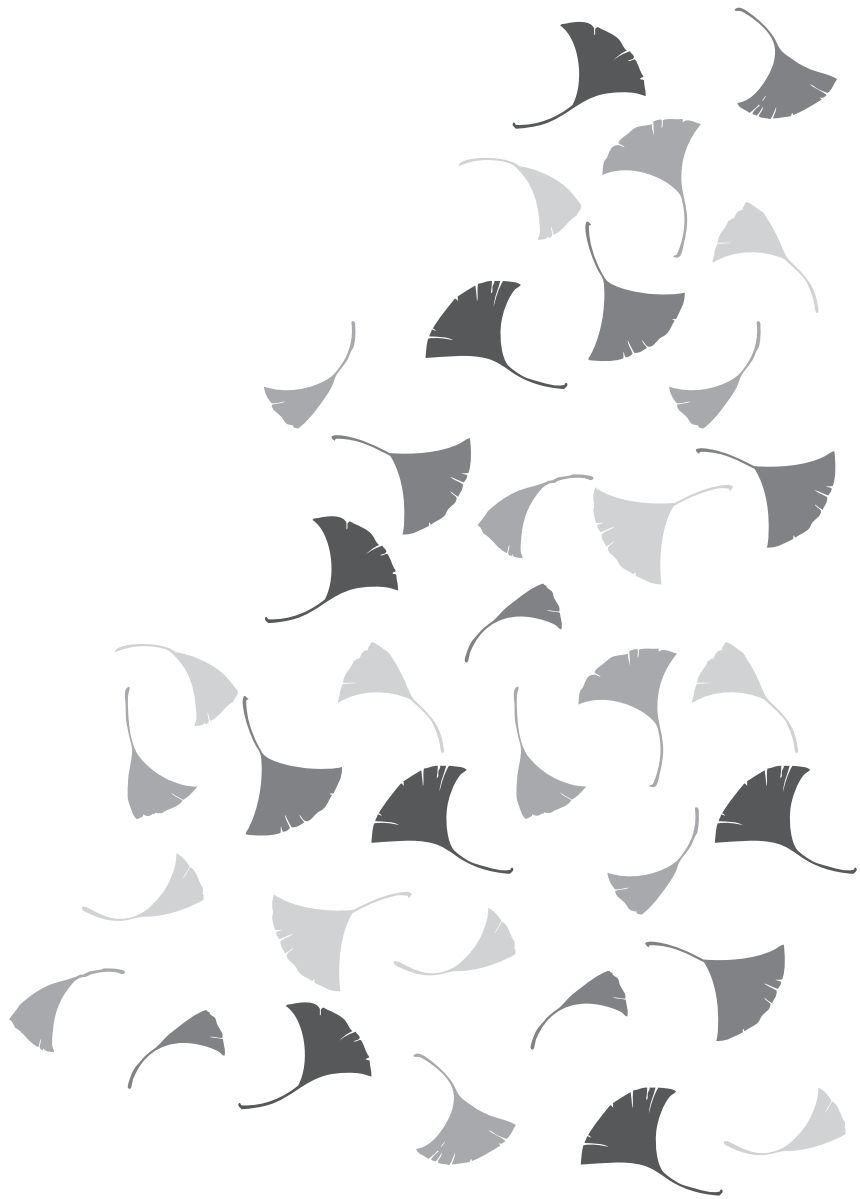
私が二十年前に調査した段階でも、松陰に関する文献が三千九百点もありまして、その全てを見ることは困難であります。それが注記の記

載を見ただけで、その文献がご自分の研究テーマに必要か否か、直ちに判断出来るのであります。注記を工夫することは、このように研究時間の短縮にも効果があります。

本日お配りをした資料「読む書誌をつくる」〔「文献探索」二〇〇一号掲載〕に、注記の記載法について書いておりますので、後でご覧いただければ有り難いと思います。これらの情報が公開されれば、書誌作成者の苦勞も生かされるのではないのでしょうか。

これまで無味乾燥と言われてきた書誌が、注記を見ますと色々の発見が出てきまして、結構楽しくなつて来ると思われます。

私が書誌作成に携わって得たつたない結論であります。何か参考になれば幸いです。本日はありがとうございます。



俳句八句

山内 明子

爽やかに挨拶返し誰だっけ

何故好きかなんて分からぬ君もうるかも

寒烏賊食ふぶつ切りにせし腸も食ふ

煮えばなの味噌汁露のたう散し

幅跳びでの推薦拒み受験の子

もしもしの一語で分かる合格と

花粉症突然にくる恋と同じ

田螺食ふ銀座に久留米絋着て

川柳・自由吟（雑吟）

大村 英正

三十五、三高を二高に変えた更年期

この二十句は平成二十五年九月から平成二十六年五月東葛川柳会機関誌「ぬかる道」の「とうかつメッセ」に入選作として掲載していただいた拙句である。

- 一、島で冷え神社で凍る日中韓
- 二、恐ろしや津波竜巻地震妻
- 三、日中で作れ尖閣のせる棚
- 四、党の数よりも少ない温かみ
- 五、知恵無くて予算が余る復興費
- 六、攻撃前お返ししてね平和賞
- 七、選挙では貸してもあげても倍戻り
- 八、発泡酒手本に軽を増税し
- 九、また一年豪雪猛暑妻の愚痴
- 十、経済をチラシで学ぶ我が愚妻
- 十一、優先席 スマホ ギターとランドセル
- 十二、改造の目玉はやっぱり総理でしょう
- 十三、犬猫かネットのシッターに預ける世
- 十四、歌もなくマスクゴーグル花見酒
- 十五、詰めこんだ夢と教科書子の背中
- 十六、シルバーと呼ばれて人材にされる
- 十七、持てぬ身にや高見の見物乱高下
- 十八、惚けじゃない惚れているんだ未だ傘寿
- 十九、君にだけ言うその話何人目
- 二十、西欧が勝てぬ種目を消す五輪
- 二十一、知りました妻の正体定年後
- 二十二、イブシロン二回の夢を見せる技
- 二十三、使い途今度は五輪復興費
- 二十四、納めたなあ年貢と矛と所得税
- 二十五、仮設から五輪見に行く悪い夢
- 二十六、五輪まで生きる！年賀多い春
- 二十七、利休とてお茶を濁せぬ都構想
- 二十八、8%ミソもキャビアも一緒くた
- 二十九、公平なフリをしたがる消費税
- 三十、上昇中体力口数卒寿翁
- 三十一、恥じらいとウエストサイズ反比例
- 三十二、この部下もわが子思うことにする
- 三十三、不思議だなあ妻の年金妻のもの
- 三十四、再雇用してくれたのは愚妻だけ

この十五句は平成二十五年五月から平成二十六年四月、朝日新聞「千葉笑い」欄に掲載していた拙句である。

素人から専門家への道..

患者図書館の制度化に向けての小児図書館運動40周年

菊池 佑 (日本病院患者図書館協会)

△はじめに▽

2002年に富士山麓に近い場所に日本最初の「専従」司書担当の患者図書館「あすなろ図書館」が静岡がんセンター内に誕生した。この日本初の本格的(担当者・施設・設備・癒しと情報、予算)な患者図書館につながる第一歩はボランティア活動であることを知る人は少ない。

△ボランティア活動の二面性▽

さて、専門図書館関係者からみれば、素人のボランティア活動は生活がかかっておらず、善意に基づく活動なので知識と技術は不十分である。

しかし、ボランティア活動にはもう一つの側面がある。それは、まだ制度化されていない分野での開拓者(バイオニア)としての役割である。

今、職業として成立して生計を立てられるよ

うになった多くのものは、最初は正に素人が始めたと言っても過言ではない。

△患者図書館運動は小児病棟でのボランティア活動から始まった▽

1970年代は日本では患者図書館を知る人が図書館員も含めて極めて少なく、このような初期段階では、まず「啓発」活動が必要と認識し、ボランティア担当の患者図書館も積極的に図書館界に紹介した。

病院関係者も患者図書館を知る人は稀有で「灯台もと暗し」の実情から、病院内でも啓発活動が必要と痛感した。関東地方では皆無の患者図書館の一つとして小児図書館ボランティア活動を世田谷の国立大蔵病院(現・国立成育医療研究センター)で開始し、1年後の1978年に「サンケイリビング新聞」に掲載され、その後は、日経、毎日、朝日、読売と取材が続いたが、1983年に出版の『患者と図書館』を

記者に手渡すと小児だけでなく成人も含む患者図書館の必要性を各紙は報道してくれた。

マスメディアのお陰で図書館界だけでなく社会そして医療関係者にも患者図書館が知られることになり、院内の医学図書室担当司書の兼務としての患者図書館サービスも全国的に増えていった。

1990年代からは「量」の拡大から「質」の確保の段階に入った。つまりボランティアではなく司書担当の患者図書館を増やしていくことを目標とした。

△日本で最初の専従の患者図書館担当の患者図書館誕生▽

2002年、静岡がんセンターに専従司書担当では日本で最初の患者図書館の設置では設計段階から私が参画し、欧米の視察から学んだことを生かして「専従司書、施設設備、癒しと情報サービス」を構築し初代の患者図書館司書として勤務の機会を与えられた。

1階の玄関付近で売店近く病院内では最も人目に付きやすい場所にある。120平方メートルの患者図書館にはビデオ室(個室)もある。また館内貸出だけでなく、ブックトラックで病棟・病室巡回による貸出しも毎週行う。また病室の液晶パネルからは患者図書館の蔵書検索も可能。ホスピス病棟にも貸出しも行うなど、き

め細かい図書館サービスを提供している。

△電子レファレンス・ツールとしての「Web患者図書館」▽

一般向けの「健康医療情報データベース」が日本に欠如していたため、私は患者図書館を退職後に「Web患者図書館」を構築しネット上に公開した。これは公共図書館でもレファレンスに大いに活用されてきた。

患者図書館は健康医療情報に関する文献も多数揃えており、(1)公共図書館と(2)専門図書館(医療)の2つの機能を併せ持つ図書館に進化している。

他のデータベースにない特徴としては、図書館員に質問しにくいこと、つまり排泄の悩みでは「尿漏れ」や「便漏れ」、性生活問題では「性感染症」、がんの治療後の後遺症としての性的不能での悩みでは「がん」「性生活」の検索語をそれぞれ入力すれば、現物を最寄りの公共図書館でも図書館員を介せずに直接書架に行つて目的のものを入手できる。

雑誌の場合は、排泄と性の問題は多数の記事の中に含まれるので、他人に何を読むのかを知られることはない。新聞も図書館担当者に質問せずに密かに必要な情報にアクセス可能である。Web患者図書館は利用者の「気持ち」まで配慮したデータベースと言える。

△患者図書館司書の研修の実態▽

医療者(医師や看護師など)のための図書館、つまり病院図書室または医学図書室と呼ばれるものが全国に多数ある。担当者の多くが非常勤という点で患者図書館に共通するが、医療者たちは「自分たちの仕事のための」図書館という認識が高いので図書館担当者の質向上のために研修支援に理解を示すところが多い。

患者図書館は患者や家族の図書館、つまり医療者にとっては「間接的」(他人事)なので必要性を理解するものの積極的な研修支援する病院は少ないため、研修は年休を取り自費で行うのが通常である。同じ非常勤職の病院内医学図書室担当者は医師や看護師の後押しで研修に積極的に出かける所が多く、全国の患者図書館専従司書たちは不公平感を抱いている。日本では患者中心の医療を標榜する病院でも、図書館分野では医療者中心が多く欧米と大きく異なることを指摘しておきたい。

△患者図書館司書養成講座(図書館員のための医学講座)▽

患者図書館司書は、医学と関連文献について知識も身に付けることが必要であり、2004年に「医学概論」(担当は医師)、解剖生理学(担当は看護師)、患者図書館資料論(健

康医療情報リテラシー論を私が担当)の講座(月1回の計5〜6回のコース)を開始した。当初の予想を超えて、患者図書館員だけでなく、公共図書館、医学図書館、看護学校図書館、学校図書館、大学図書館など多方面からの参加が見られた。2014年度は看護師自身の参加もあった。理由は自身が患者図書館の責任者になった場合を考えて、患者の欲求や心理を理解するためだという。ちなみに、患者図書館のカウンターには司書が詰めているが、司書が所属する部門の責任者は看護師であることと、患者図書館内には(1)専従司書用のカウンターと、(2)治療関連の相談を受ける看護師のカウンターがある病院もある。

△後世に期待すること▽

「Web患者図書館」をネット上に公開して14年、文献はすべて手作業による入力であり2017年に約10万件に達したが、人員と予算不足で現在中断している。このデータベースに刺激されて、もっと良いものと作ってやろうという気概を持つ人たちの出現を期待したが、14年間ついに現れず。既存のものに依存するだけでは日本の図書館の真の発展は望めないのではないか?

人工知能(AI)による文献検索とレファレンスサービスは経験豊富な司書を凌駕する時代

に近い。専門図書館や患者図書館や公共図書館はどうなるのか？ ITとAIを巧みに活用できる人材育成と同時に新たな役割の創出も必須である。輝け、日本の図書館！

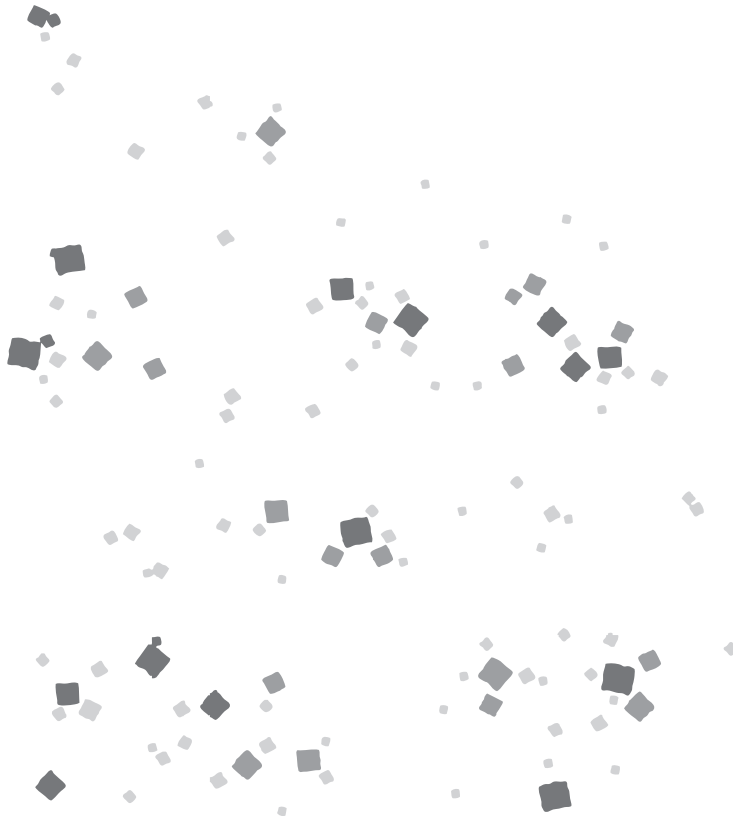
△おわりに▽

患者図書館は患者の娯楽や癒しにとどまらず医療情報へのアクセス権をも保障する機関として病院ではなくてはならないものとの認識は広がりつつあるが、法的根拠がなく予算化が難しいため患者図書館の普及率は未だに低く、質の格差も大きい。

法律と予算に基づく患者図書館の実現には、患者図書館関係者だけでなく図書館全体、医療関係者、そして国民の理解と協力が必要である。

参考文献

1. 菊池佑・菅原勲共編著『患者と図書館』明窓社 1983年
2. 菊池佑著『病院患者図書館・患者・市民に教育・文化・医療情報を提供』出版ニュース社 2002年



ライブラリアンとピアノリスト

甲斐美和子さんと藤田晴子さんの足跡を辿って

古賀 節子

冬の一夜、シューベルトの歌曲「冬の旅」の熱唱を聴いた後のパーティーで、音楽評論家萩谷由喜子さんと言葉を交わす機会があった。彼女は、私がライブラリアンと分かると、「コロ

ンビア大学図書館にいらした甲斐美和子さんをご存じですか」と問われた。私はその時、甲斐さんを知らなかった。しかし、後に大変な業績を残されたライブラリアンであることを萩谷さんの著書『クワイツァーの肖像…日本の音楽界を育てたピアノリスト』を読んで知った。

同書には、1900年〜1920年代生まれの日本人女性ピアノリスト、井口愛子、原智恵子、井上園子、甲斐美和子、藤田晴子など、戦前から戦後にかけて日本のピアノ界で活躍した九名の女性ピアノリストの名が記されている。その中に、甲斐美和子さんと共に、国立国会図書館専門調査員藤田晴子さんの名前があることに気づいた。お二方とも一流のピアノリストでありながらライブラリアンの道を歩み、それぞれ後世に

残る素晴らしい業績を残された方達だ。私はお二人の生涯に関心を抱き、その足跡を辿ってみた。

日米貿易商社の創業者甲斐織衛の孫娘の甲斐美和子さんは、大正2（1913）年、サンフランシスコで生まれ、日米を行き来する少女時代をすごした。その間、亡命ロシア系ユダヤ人マキシム・シャピロについてピアノを学び、昭和7（1932）年の第1回日本音楽コンクールでは大賞を受賞、昭和12（1937）年第3回シヨパン国際ピアノコンクールには原智恵子と共に参加する程のピアノリストだった。しかし、第二次世界大戦開戦直前、アメリカに渡り、開戦と同時にユタ州の強制収容所に収容された。

そこで、調査に訪れた米政府派遣の若い人類学教授の計らいで、昭和19（1944）年に収容所を出て、ニューヨークへ移り住み、職探しをした。その時の様子を日本経済新聞2008年

12月12日文化欄に、次のように書いている。「コロンビア大学の門をくぐり、一番立派な建物に入ったら、そこが中央図書館で図書館長にあって、仕事がないかと尋ねたら、タイプが打てるかと聞かれ、できると言うとその場で採用された。こうして時給6セントでコロンビア大学中央図書館で働き始めた」

このような経緯で司書としての仕事をはじめた。その後、同大C・V・スター東亜図書館に移り、日本語図書セクションで目録作成の業務に就き、昭和20（1945）年、セクション責任者に就任。以来、昭和58（1983）年70歳で退職するまで、司書として勤めた。

東亜図書館は、昭和4（1929）年に設立された日本文化学会の蔵書を引き継いで創設され、ドナルド・キーンが自伝の中で触れている角田柳作先生がおられた戦前・戦後の米国での日本文化研究を支えた図書館の一つで、甲斐さんは、米国議会図書館の図書を譲り受けるなどして蔵書の充実に尽くされた。昭和58（1983）年の退職時には、彼女の功績を称えて同館入り口の壁に記念のプレートが貼られ、記念の桜が植えられた。日本からは宝冠藤花章が平成7（1997）年贈られた。

退職後も甲斐さんは図書館に通い精力的に仕事を続けられた。昭和61（1986）年、“The

David Eugene Smith Collection of Works in Japanese on Japanese Mathematics”を、平成8（1996）年には、“Japanese Woodblock Printed Books and other Unique Japanese Materials at Columbia University”を2巻4分冊で上梓された。その後も、同図書館の日本語蔵書構築についての歴史的記録の編纂に、2011年12月98歳で亡くなるまで携わられた。

甲斐さんは、「生き字引」といわれ、調査・研究に同図書館を訪れる研究者を支援し、また体調のことや孫の話ばかりする90歳代の友人より、若い研究者を食事に誘うなどして楽しまれたそう。

甲斐さんは収容所にいた時には、ピアノを音楽学校で教えたり、コンサートを開いた記録もあるが、ロンビア大学図書館に就任されてからは、全くピアノとの縁は切れた。何故、ピアノリストとしてのキャリアを捨てたのか、これについては誰も分かっていないようだ。しかし、このことに関連した以下の記述を、オーデオ・音楽評論家高城重躬の著書『スタインウェイ物語』の中に見付けた。

「昭和42（1967）年頃、ふとのぞいた古本屋で低俗雑誌にまじって、日本のピアノの先生が使わない練習曲の楽譜が山積みになってるのを見て、これは、誰か名のあ

る人が手放したのに違いないと直感し、店の奥にも山積みなされてた楽譜全部を即座に買い求めた。そして、楽譜に書かれた立派な筆跡のサイン、求めた日付などからすぐ甲斐美和子さんのものであったことが分かった。なかには、原智恵子さんと一緒に参加したシヨパンコンクールの審査委員長から甲斐さんに贈られた楽譜も入っていた。そして、楽譜の多くには鉛筆で丹念に和音名が記され、勉強に使った和声学のノートもあった。その文字が整頓されて美しいこと。ノートにはレッスンの日付けが克明に書いてある。40年過ぎたノートの文字が昨日書いたように真新しい。」

高城氏は楽譜入手後、なんとしても甲斐さんに返したいと思い八方手をつくした結果、ロンビア大学図書館にいた甲斐さんと連絡はついた。しかし、「家にはスタインウェイはありますが、弾きません。二つの人生があってもよいと思います」といった意味の返事をもらった。図書館で仕事をされていることを知って、あのだかい稀なきちんとした整理されたノートからも、別の道を選ばれたことが伺われ、ピアノ以上、別な道のある生活を送り、社会にも貢献しておられるに違いない。

高城氏は、この様に甲斐さんのピアノリストから司書への変更を記している。

藤田晴子さんは大正7（1918）年東京で生まれ、5歳から10歳まで父親のドイツ留学についてライプツィヒで暮らし、昭和3（1928）年の夏帰国、一時神戸に住まわれたが、昭和5（1930）年12歳で、東京府立第一高等女学校（現在の都立白鷗高校）に入学。同高等女学校の教育水準は非常に高く、上の学校に行きたい人には総て男子校と同じ教科書で授業がおこなわれ、絵も当時著名な先生の指導をうけ、終生絵画に対する興味を失うことはなかった。女学校生活を心から楽しみ、夏休みにはドイツ語の童話を訳して、表紙にする水彩画を描いたりもした。学年を一番で卒業し、卒業式では答辞を読み、謝恩会で、ベートーヴェンのピアノ変奏曲を弾いた。ピアノはドイツにいた頃から始めており、女学校入学と同時に、東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部の前身）教授レオ・シロタに師事していた。

高等女学校卒業後、同校の高等科の英文科に進学、高等科在学中に、日本音楽コンクール・ピアノ部門で2位に、卒業後の昭和13（1938）年日本音楽コンクールで優勝。

昭和16（1941）年には、中央交響楽団（現・東京フィルハーモニー交響楽団）と共演した山本直忠作曲「ピアノと大編成のオーケストラのための日本幻想曲」のレコードで文部大臣賞を

受賞。日本を代表する若手ピアニストとして華々しくデビューした。

その一方、中学3年の頃、父君が大病で倒れ、家計を支える為に、ピアノの伴奏、ピアノ教師、ドイツ語教師などのアルバイトをしていた。卒業後は、トリオを組んだり、ピアノ協奏曲のソリストとして、オーケストラとの協演を含めてピアニストとしての多忙な生活を送った。

ピアノについて戦争中の想い出として、手持ちの楽譜全部とローソク立ての付いたピアノを萩窪の大田黒元雄先生のお宅に疎開させ、本郷の自宅から萩窪までピアノを弾きに自転車で行ったこと、そして、昭和20(1945)年3月の東京大空襲の後、満員の日比谷公会堂で、聴衆は国防服で、藤田さんは暖房のない会堂での演奏に、ドレスの下に真綿をいれて、東京交響楽団とピアノ協奏曲を弾いたことなどの経験もされた。

そして、藤田さんは、敗戦の翌年、昭和21(1946)年、女性が大学入試受験を認められるとすぐ、東京帝国大学法学部を受験し、女子学生1期生として法学部に入學した。学生時代藤田さんは、NHKの芸能囑託として放送の他に音楽会にも出演して演奏活動を続け、学業の傍ら、一家の大黒柱として家計も支えた。

大学進学については、女学生時代から、学科にあまり好き嫌いがなく、どの時間もあまり退

屈しなかったし、ピアノの演奏のためにも、自分にとって必要な養分であったように感じていた。また、母親のピアノの先生が、ライプツィヒ大学美術学科と同大音楽院を同時に卒業した才媛であったこともあって、女性が大学に行くことになんの躊躇もなかったと語っている。

昭和24(1949)年、東京大学法学部を卒業後、法学部助手として3年の任期を終え、初代国立国会図書館長金森徳次郎氏の面接をうけて国立国会図書館に昭和27(1952)年採用が決まり、同館調査及び立法考査局政治行政室に勤務した。国立国会図書館の仕事に就いたことについては、それまで、自分の職業を自分で選んできたという気持ちがないままに、コンクールで優勝しピアニストになって、という生活を送ってきた自分にとって、生まれて初めて、自分の職業を自らの意志で決めた職業だった、と藤田さんは語っている。

そして、更に、何故、司書になったかについては、「国会図書館で司書として、国権の機関を構成している国民の代表の人達に直接仕え、諸外国の難しい制度を調べること自体に興味があり、実際に生きた政治と密接に繋がっているから、勉強の内容が空理空論に終わらないですむ」と思い、国政の審議と直結していることが嬉しかった。また、一党一派に偏らないという決まりが、凄く魅力的で自分にはぴったりと思っ

た。」と語っている。

その後、昭和41(1966)年政治行政課長就任、昭和50(1975)年同局主幹、昭和57(1982)年に専門調査員となり翌年退官。なお選挙制度審議会委員も勤められ、音楽評論の仕事も続けられ、音楽関係の評論・エッセイを多数執筆されている。在職中の昭和56(1981)年『楽の音に寄せて』音楽之友社、退官後の昭和60(1985)年、『議会制度の諸問題』立花書房、平成14(2002)年、『シュールベルト 生涯と作品』音楽之友社、平成20(2008)年、『藤田晴子 音楽評論選』ピアノとピアノ音楽』音楽之友社から上梓されている。

昭和63(1988)年八千代国際大学教授(憲法学)就任、平成5(1993)年退職。勲三等瑞宝章受章。平成13(2001)10月20日、83歳で永眠。

私がふとしたことで知ったお二人の大先輩の足跡をなぜ辿ろうと思ったかというと、私もピアノを幼少期から習い、音楽学校入学を目標に日夜練習に励んでいたからだ。父に連れられて、藤田さんのコンサートに行った記憶もある。しかし、戦争で、ピアノも家も失い、戦後の混乱の中で、ライブラリアンの道を選んだ。ピアノから図書館の道を選んだ要因は何かと考えてみ

ると、敢えて言えば、戦争と言えるだろう。お二人についても、甲斐さんは、収容所へ入れられたこと、藤田さんは、戦後、女性の大学進学が認められたこと、ではなかるうか。こう考えると、お二人の進路変更も、戦争と無関係とは言えないのではなかるうか。

いずれにしても、ピアニストとライブラリアンの両道で大家を成したお二人の大先輩を敬愛してやまない。

本稿執筆にあたり、萩谷由喜子著『クロイツァーの肖像…日本の音楽界を育てたピアニスト』（ヤマハミュージックメディア 2016年）、高城重躬著『スタインウェイ物語』（ラジオ技術社 1978年）、藤田晴子著『藤田晴子音楽論選 ピアノとピアノ音楽』（音楽之友社 2008年）を参照しました。なお、甲斐美和子さんについては、小出いずみさんから、沢山の資料をお教え頂き心から御礼申し上げます。



輝かしい20年目の表彰へ

―図書館利用の輪を広げよう

末吉 哲郎

図書館サポートフォーラム賞の表彰も本年で19回を数え、いよいよ来年は第20回を迎えることになりました。一口に20回といっても、図書館サポートフォーラム賞の選考には幹事一同をはじめ事務局の準備体制が大変なことと思います。

第1回の表彰は一九九九年ですから毎年欠かすことなく表彰を行っている訳です。ネットで辿ってみても、毎回の表彰者・団体がその功績事由とともに表示され、広く一般にも公示されています。

毎年応募や審査の結果、表彰者が4名になったり2名の時もありますが、多彩な活動の結果が公開され、図書館の社会的評価に役立っていることと思われま

す。今後とも毎年表彰が行われ図書館や図書館員の評価、地位向上につながればと念じております。

小生の知人でも図書館員ではないけれど、住まいの近隣の図書館を週に二、三回も足を運んで調べものをして、その調査結果を年2回所属する団体の機関誌に問題集として10問ずつ出題、回答付きで紹介している御仁がいます。例えば「一万年前の日本の地形、気候は？」
「二〇一五年に発足のASEANの構成国は？」
などを設問し、回答を10行くらいで紹介しています。しかも20年間続けているのですが、残念ながら図書館員ではありません。

我が図書館サポートフォーラムは対象を図書館員、団体に限っていますが、今後このような図書館利用者にも幅を広げたら面白くなりそうな気がいたします。

6歳の思い出 ― 恐山のイタコー

平井 紀子

1940年、私は東京の大森で生まれた。

太平洋戦争が始まり、庶民の生活はしだいに厳しくなった。お米なども配給制度となって、食べる物も満足に手に入らず、人々は苦しい生活を強いられるようになった。

母は、生まれてまだ5か月にも満たない私を育てるために、危険な東京を離れて実家の青森に疎開し、6歳まで青森で暮らした。翌年から、東京に帰り、東京の大森第四小学校に入学することが決まっていたので、この頃のことはいくよく覚えていて。

実家は青森県下北郡田名部町、現在は、むつ市になっている。

地図で見ると、下北半島の上部、鉾（まさかり）の形をした先の細いところに位置する。冬の雪も、この辺は青森地方全体から見ると、さほど多くないらしい。

母の実家は、「下の家」（したのえ）と呼ばれ、一般の家とは別格であったらしい。昔は城の一

部であったと聞いている。家を出て坂道を登ると城があった。今は小学校になっているが、城の下の家であることから、「下の家」と呼ばれていた。

夏祭りのときは、一軒一軒を廻る獅子舞のお囃子は、下の家に来ると、普通の家の獅子舞とは異なる。

初の木垣の細い道を通り、下の家の玄関口に来ると、お囃子の一行は衣装を着がえて、舞を始める。お囃子は、一変して優雅な曲になり、笛の音が一段と高まる。城への敬意からであろうか。今も昔の慣習がそのまま引き継がれているらしい。

下の家は、広い居間とそれに続く3部屋、短い廊下をはさんで、別棟のように建てられた奥に、一部屋がある。

居間には、囲炉裏があり、天井から吊り下げた自在鉤には、鉄瓶の湯がいつも沸いていた。

8月のお盆の夏祭りには、庭に面した部屋に

は、先祖代々大切に保管されている甲冑装束を身につけた70センチぐらいの銅像が倉から出されて飾られる。幼い私は、この甲冑姿の銅像に興味をもった。誰も居ないとき、怖いながらも甲冑のそばに行き、手でさわわり、がらんどうの頭部のうしろから手を差し込み、口や目の穴に手を入れて確かめた。冷たかった。正面から、もう一度見ると一層怖ろしくなり、その後は近づくのをやめた。

その甲冑装束の銅像が置かれている後ろにある押入れは、2段に分かれ、上段には幾つかの段がついた引き出しがある。祖母が引き出しを空けて整理していたときに覗いたら、刀や戦いの時に使ったと思われる古びた武器の品々があり、下段の引き出しには男物の古い着物が入っていた。

奥の別部屋を除き、どの部屋も広く、6歳の私はどこに居ても落ち着かず、留守にする母の帰りをいつも待っていた。

母が居ないとき、好奇心で、こわごわ廊下を渡った別部屋を覗いたことがある。そこには、知らないおじいさんが居た。そのおじいさんは、食事は家族とは別で、話もほとんどしなかった。一日中、一人で火鉢に向かって煙管をふかしていた。長い煙管に煙草をつめ、大きく吸っては、火鉢の端にパーンパーンとたたきつける音が時々聞こえてくる。

あのおじいさんは誰なのだろう。自分とどのような関係の人なのかを聞きかかったが、幼にも聞いては悪いことのように思えた。母の居ない時、思い切って祖母に聞いてみた。祖母は困ったように「イタコのお告げなんだよ」と、私には意味不明なことを言った。母に「イタコって何？」と聞くと、恐山のイタコのことだと教えてくれた。

田名部は平凡な田舎町であるが、母の実家から車で30分ぐらいの所に、信仰習俗で有名な「恐山」がある。

恐山は日本3大霊山の一つで、「イタコ」と言って、死者の御霊を呼びよせ、「口寄せ」を行う盲目の巫女で名高い。口寄せとは、死者の霊が降りてきて、巫女などの霊媒の口を通し、親族の死者の言葉を子孫や信者の耳元で告げることらしい。多くは、悩み事をもっている人がイタコのところに來るらしい。巫女を通して死者と話すことは、現世と他界とのコミュニケーションでも言えようか。

恐山は貞観4（862）年に、天台宗の慈覚大師により霊山として開山されたと伝えられている。開山の契機となったのは、慈覚大師が唐で修行中の頃、夢枕に立った高僧のお告げによると言われている。

山全体がゴツゴツした広い岩地で、立ちこめる硫黄臭と荒涼とした風景は、その名が示すよ

うに薄気味悪いところである。ところどころに、赤いよだれ掛けをつけた小さな地藏様があり、地藏様の頭には風車が廻っている。

恐山へ向かう道にある太鼓橋には、三途（さんず）の川と言って、悪人には、この橋が針の山に見えて渡れないという。

恐山には、本堂のほか、地藏堂、大師堂、宿坊、地獄谷とか血の池地獄と呼ばれる処がある。

私は大学図書館退職後、70才までは2、3の大学で司書課程の非常勤講師を勤めたが、すべての時間がフリーになった時、母と二人で墓参も兼ねて青森に出かけた。幼い時期の6年間を青森で過ごした私は、幼な心にもあの青森の家での出来事などに溜まった疑問を晴らしたいと思った。

離れに居たおじいさんのことや家のルーツなどを、今だったら、近所に住んでいる親戚にも聴けるような気がした。

生前の母は靈感が強く、特に、へよくないことvが当たったように記憶している。「明日、地震が来るんじゃない？」という、本当に地震になる。母にはイタコの血が混じっているのかもしれないと思うことが多かった。

「あのおじいさんは誰？」と聞くと、母は「おばあちゃん、何と言っていた？」と逆に聞き返

された。祖母は青森弁で分かりにくい言葉だったから「意味不明で〜イタコが何とか」と、言っていたわ。母はしばらく黙っていたが、「その通りみたいよ」。

一体どういことなのか、一層不可解になった。祖母は、イタコの口寄せから聞いたのだろう。きつと、イタコとの口寄せを体験したに違いない。

母の話によると、祖母はやはり離れのおじいさんのことをイタコから聴いたそうだ。イタコの話をもとめると、「町はずれの小さな家に住んでいる変わり者のあの老人は、下の家の遠い親戚に当たる者だから大切にしないと家に不幸が起ころ」というような事だ。それで、祖母はその老人を家の離れに住ませたという。眉唾ものであるが、嘘のようで本当の話らしい。

長い廊下の真ん中に立ち、庭をほおと眺めた。あの6歳の頃の記憶にあるこの庭は広く、夏の草花は生き生きしていたが、いま見る庭は、記憶にあるほど広くはなく、荒れた庭になっている。背の高い松の木は、自分が小さかったから大きく見えたのであり、下の家の松としての誇りを持っていたから、一層そのように思えたのかもしれない。

それに、来年からは東京に戻り、家の近くの小学校に入学するので、頭の中は学校のことで

一杯だった。

あれ程関心を持っていた青森のことも忘れがちになっていた。

母も亡くなり、今となっては当時のことを知る人も少なく、私の疑問は未解決のままである。



二匹の犬の物語

山崎 久道

柴犬来たる

わが家には、二匹の柴犬（しばけん）がいた。「シバイヌ」と呼ぶ人もいる。それはともかく、わが家には雌のモモと、雄のクウがいた。

二匹がこの家に来た経緯は、まったく違って、モモは、さるペットショップに行つて、そこで選んで、買い求めてきた。柴犬が飼いたかつたからである。

モモは、そこに付けられた名札を見ると、生まれて何ヶ月かは売れないで、いわゆる「売れ残り」だったことが知れた。でも、どこか上品な感じがするところが、気に入つた。

ただ、そうした出自のためか、モモには、端正な顔立ちに似ず、どこか世をすねたような感じがあつた。簡単には、感情を表面に出すことがなく、何を考えているのか分からない。（人間でも、そうした人はいる。）

一方のクウはさる町家で柴犬の子どもが生まれ、「柴犬あげます」と掲示していたのを見て

応募し、三ヶ月後、晴れて貰い受けたのである。愛情たっぷり育てられたと見え、中型犬なのに実に愛くるしい表情や所作をする。クウはモモより一歳半年下だつた。

柴犬との生活

それから、二匹の柴犬との生活が始まつた。柴犬を二匹釣れての散歩は割と珍しいと見えて、「可愛いですね。」と眼を細めて近づいてこられる方もあれば、「何を偉そうに連れてくるんだ。」と行つてくる人もいた。（後者は例外的ではあるが。）

日常生活でも、二匹の性格の違いは歴然としていた。モモは、一体散歩に行きたいのかどうか、どうもよく分からない。連れ出せば、それなりに歩くが、ただ、自分が満足すると、家に帰りたような所作をする。

そのモモは、二度くらい、門の扉が開いていたからなのか、扉の下をくぐつたからなのか、

家から脱走したことがある。無表情だが、人なつっこい（なんたる矛盾か！）ので、人様に危害を加えることはないだろうと思つていた。二度目の時だつたか、この地域を管轄する警察から連絡が来た。誰か親切な人がいて、警察に届けてくれたから、引き取りに来てほしいというのである。やれやれと思つて、警察に迎えに行つた。

担当の女性警察官が、警察内の犬舎に案内してくれて、「モモちゃん、お父さんが迎えに来ましたよ。」と言葉をかけてくれた。しかし、モモは、ワンとも鳴かず、うれしそうに素振りも見せない。連れて帰るときは、おとなしく付いてきたが、「あなた、本当にこの子の飼い主なのですか」と言われるのではないかとビクビクしながら、淡々と歩くモモを連れて、警察署を後にした。

性格の違う二匹

一方のクウは、逆に「人間的な」犬だつた。柴犬は、飼い主以外には、警戒心が強いというが、その意味で、典型的な柴犬だつた。クウは「警備犬」として実に有能だつたのである。外を他の犬が通つたり、怪しげな人が歩いていたりすると、広い家ではないが、表門から裏門まで回つて吠えていた。そのせいか、わが家にはこの間、空き巣や不審者が入ることはなかつた。

ただ、その分、社会性に欠ける、というか、他の犬と融和できないのには困った。「ワンコもどうぞ」という店があつて、散歩の途中で寄ろうとしても、クウが他の犬に拒絶反応を示すので、入ることができない。モモは、まったく大丈夫なのに。

クウが、心を許したのは、飼い主を除けば、モモだけだったのである。モモは外交的で知らない人に極めて愛想よく振る舞う。まるで、ひとかどの処世術を持っているようであった。

ただ、モモにも意地悪なところがあつて、クウが散歩のときリードを引っ張つて懸命に歩くので、家に帰り着いて弱つてくると、ここぞとばかり、クウを押さえつける。まるで、「私の方が、先輩なのよ。」と誇示しているみたいであつた。もつとも、クウの方も、モモが好きなのに、私たちがモモをかわいがつたりすると、モモに突然体当たりしてきたりした。

二匹の柴犬を見送つて

でも、二匹はいいコンビだった。クウは、精神的な面でモモに頼り切っていた節があるし、モモも、少し迷惑な面はあると感じつつも、クウとの生活をエンジョイしていたように見えた。

モモは昨年の七月三日に死んだ。十五年に三ヶ月近く足りなかった。それから、ほぼ一年

後、クウも、今年の七月七日に息をひきとつた。折しも七夕祭りの日である。まるで、天の川を渡つて大好きなモモに会いに行つたかのようだった。

今ごろ、二匹は再会を喜びあっているかもしれない。クウは全身で、喜びを表して、モモはひょうひょうと、しかし少しうれしそうな表情を浮かべて。そう思うと、何かホッとする。(終)

改稿 図書館の風景、読書の姿

水谷 長志

本稿の由来

図書館員として長く東京国立近代美術館のアートライブラリで働いてきたが、「本」の収集・管理・提供から離れて、「本」そのもの、「本」自体に肉薄したい、その成り立ちに分け入り、立ち会いたいという欲求と願いが、この数年、特にあの東日本大震災の日から、なぜだか昂じてきた。

なかなかその機会を見つけることもできないままに日を送ってきたが、幸いなことに美篤堂^{みすず}という本工場を長野県伊那市に置く、手製本の専門会社が、「本づくり学校」を2014年から始めて、私は2年目の2015年度に基礎科2期、2016年度に応用科2期を修了した。ただ、2016年度の応用科2期は、JALプロジェクトというやたらに海外に出張の多い事業に追いまくられて、9回の開講講座のうち、4回も休まざるを得なかったので、無理を言っておいて、留年させてもらい、2017年度に、応用科

の二度目を受講することとなった。左に基礎科について、その講習の内容を書いて、紹介してみよう。

本づくり学校二期生「2015年度」基礎科授業（会場は9月を除きすべて横浜・仲町台の「いのちの木」というコミュニティカフェ）

【基礎科二期・前期】

- 1) 4月11日 オリエンテーションからA4カルトン（ゴムバンド付）14時～16時30分 講師：美篤堂・上島松男
- 2) 和装本①（5月9日）美篤堂・上島明子
- 3) ソフトカバー本（5月23日）美篤堂・上島松男
- 4) 活版印刷座学①組版（6月13日）嘉瑞工房・高岡昌生
- 5) 活版印刷座学②印刷（6月27日）嘉瑞工房・高岡昌生
- 6) 編集・デザインについて①（7月11日）e

a

7) 布表紙の本（活版印刷したトビラを入れて）（7月25日）上島松男

8) 蛇腹本製本（8月8日）上島明子

9) 編集・デザインについて②（8月22日）e

a

【基礎科二期・後期】

10) 丸背上製本（9月12日）美篤堂伊那製本所・上島松男・上島真一・小泉翔

11) 伊那谷ブックツトリズム・戦前の書架見学（9月13日）長野県立図書館・平賀研也

12) 絵本製本（10月10日）（6講と8講でまとめた作品を製本）上島松男

13) 糸かがり2種（10月24日）造本アインプー

フ・毛利彩乃

14) ドイツの糊染め紙（クライスタ・パピヤ）

（11月14日）美篤堂・上島明子

15) 革表紙のスケッチブック（クライスタパピヤを見返しに）（11月28日）①材料準備・上島

松男・上島由江

16) 革表紙のスケッチブック（クライスタパピヤを見返しに）（12月12日）②糸かがり実習

上島松男・上島由江

17) 和装本②麻の葉綴じ（1月23日）

18) 紙と印刷について（2月13日）

19) A4ハードカバー（修了展示の企画）（2月27日）

20) 修了展出品作について講師による講評会(3月26日)

講師として登場する上島松男氏が「親方」であり学校の校長先生、明子さんが親方のご長女で教頭先生というところ。伊那工場からは工場長の真一さんと若手職人の小泉翔さん。9月には伊那に一泊して丸背上製本(とても難し)に挑戦して、翌日は長野県立図書館の平賀図書館長(前伊那市立図書館長、第8回のLibrary of the Year 2013受賞)のガイドで伊那谷図書館巡りもあった。最後には、各人の自由創作製本の展示から講評会で幕を閉じた。

この美篤堂は、日本タイポグラフィ協会顕彰第16回佐藤敬之輔賞企業・団体部門を2017年の4月に受賞し、その手業の紹介のためにこれまでにも、『美篤堂とつくる美しい手製本本づくりの教科書 12のレッスン』、『美篤堂とはじめる本の修理と仕立て直し』(いずれも河出書房新社より)を刊行している。特に後者は、学校図書館、公共図書館に役だつ良書だ。美篤堂は本づくり学校を一層広い文脈に置くために、2016年に本づくり協会を立ち上げた。その総会が昨年の6月に印刷博物館のゲーテンベルク・ルームで開催され、これに合わせて協会の機関誌としてBOOK ARTS AND CRAFTSを創刊した。創刊号に私は、「コラム」愉しい本づ

くりの学び方」に「お雇い外国人と洋式製本」について書き、2017年7月の「本づくり協会の集い」の開催に合わせた2号に以下の原稿を寄稿した。

「本稿の由来」への註

(i) <http://www.misuzudo-b.com/>
(ii) <http://www.misuzudo-b.com/hondukuri/hondukuri.htm>

(iii) <https://www.iinochi-no-ki.com/>

(iv) 基礎科二期の講評会は2016年3月26日の土曜日に仲町台の「いのちの木」で開かれた。その日は本づくり学校の卒業式でもあり、上島松男校長、明子教頭ほか講師が受講生の卒業制作へ向けて講評される記念の日であるのだが、偶然のことが重なって記憶に残る一日になった。少し長くなるけれども書いておきたい。松男親方は美篤堂のHPによれば、昭和14(1939)年東京生まれ、昭和19(1944)年に長野県上伊那郡美篤村に疎開、昭和29(1954)年に15歳で東京都千代田区錦町の関山製本社に入社、以来製本一筋。昭和58(1983)年に美篤堂設立、現在の代表取締役は明子さん。そんな親方の製本昔話を技術習得の合間に教わるのは、本づくり学校の楽しみの大きな一つ。

で、講評会当日の朝日新聞の朝刊一面に鷺田

清一の「折々のことば」(351)に載ったのが、深沢七郎の『庶民列伝』の次の一文、「ふたりで揃ってお膳に頭を下げる恰好は、小學生が先生の前でお辞儀している様である」(「序章」)であった。「製本屋の夫婦はこれ(コッペパン二つと朝飯の残りの冷めたみそ汁だけ)を前に「いただきます」と深く頭を下げる」と鷺田が書いているその情景に、かつての製本業を生業とする職人たちの暮らしや、かつての松男親方の姿が髣髴とされるのであった。さらに鷺田は書く。「仕事でも話しても紙を折る手は休まない。体を動かし、体を養う糧を得る：命を頂いていることへの畏敬があたりまえにあった」と。

たしかに手製本も活字印刷も絶滅危惧種であり、それを学ぶ本づくり学校の面々もかなりの絶滅方面の人種である。さりながら、残すに値する技術であることは、紛れもない真実であり、その片隅に連なれることにあらためて感謝する朝であったし、この奇遇は、かなり嬉しいものであった。

(v) <http://www.rypography.or.jp/topics/topics01.html#110>
(vi) <http://www.honzukuri.org/>



図書館を見て歩く、国内、海外ともに。建築
 を用具用度を、もちろん書架を。図書館には固
 有で独特の道具や装置が多くある。図書館用品
 の専門企業、キハラは日本図書館協会とともに
 歴史的図書館用品の収集事業を行っている奇特

な会社だ。^①若い人にはもう何に使っていたか分
 からない器具も沢山あるだろう。なにしろ5×
 3インチの検索の図書カードが姿を消している
 のだから。書架と言えばペトロスキー^②の『本棚
 の歴史』（白水社）はめっっぽう面白い。本づく

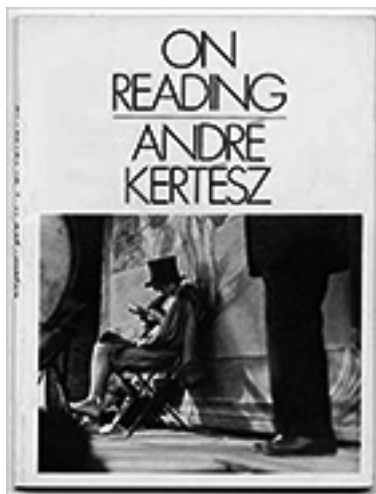


(図1)

りに興味のある人には、本を入れる・置く容器
 としてこちらにも関心を寄せてもらいたいし、
 もちろんより大きな装置としての図書館にも。

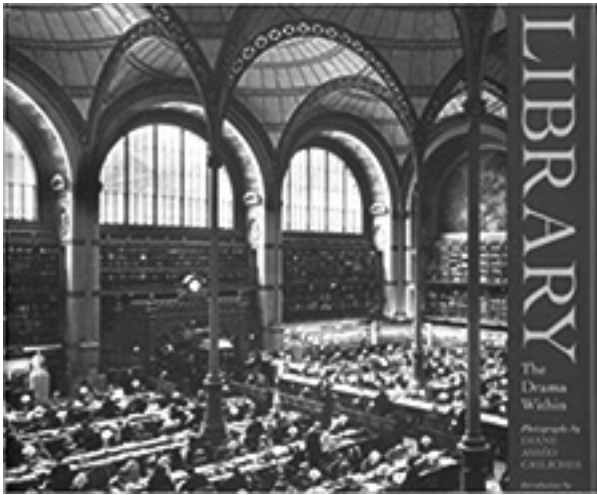
図書館の美を正面から向き合ってパキーンと
 した写真を撮ったのはヘーファー^③。Libraries^④の
 表紙はアムステルダムの国立美術館の図書館。
 世界で最も美しいアートルライブラリだ(図1)。
 読書する人の姿を撮ったのはケルテス^⑤。彼の
On Reading は、最近、創元社から『読む時間』
 として刊行されたが、私はペンギンブックスの
 75年版で楽しんできた(図2)。

ケルテスが撮った本を読む人の姿の写真で、



(図2)

とりわけ印象深いのは、藤田嗣治を撮った一枚
 だ。食い入るように集中する藤田の読書の姿は、
 林洋子著『藤田嗣治 本のしごと』(集英社新
 書、2011)のカバーを飾っている(図3)。
 東京国立近代美術館のアートルライブラリは藤田



(図4)



(図3)

の旧蔵書をほとんどすべて受入れ、そのリストを公開している。⁽⁸⁾

さて、図書館の中で読む人の写真集はどうだろう。LIBRARY: The Drama Within⁽⁹⁾が、いま一

番気に入っている(図4)。ヘーファーの序文はエーゴによるものだが、こちらは議会図書館長のブアステイン⁽⁹⁾とくる。各写真にはその図書館の説明と写真に相応しい、多くは作家の言葉が添えられている。例えば、マルチェリアーナ図書館⁽¹⁰⁾にはロングフェロー⁽¹¹⁾の一文、「学生は図書館の四方の壁の中に我が身のローマを、フイレンツエを、輝けるイタリアのすべてを手にし、書物の中に古代世界の廃墟とモダン・ワールドの栄華をともに見出すのだ」が、写真の細部へと観者を誘う(図5)。

図書館の中の人を撮った日本の写真集には『図書館雑誌』に長年連載した漆原宏の『ぼくは、図書館がすき』(日本図書館協会)がある、⁽¹²⁾というか漆原の写真集しかない。図書館学者の根本彰の『場所としての図書館・空間としての図書館』(学文社)も堅苦しさの無い好著だ。こんな、図書館と読書の風景や姿を見るのも本づくりのなにかしらヒントになるのでお薦めしたい。

ここまで、「図書館の風景、読書の姿」を写真から捕まえる試みの一端を紹介してきた。「図書館と映画」についても、さらにいろいろなまとめがある。飯島明子さんは『映画の中の本屋と図書館』をすでに2冊著わしている(ともに日本図書刊行会、



(図5)

2004、2006)。動画ではYoutubeで容易に見られる *Bookstores and Libraries - The Most Wonderful Places on Earth* が素敵だ。ちなみにこの動画のラストは、デイズニー・アニメ版の『美女と野獣』だ。野獣の壮大な書斎というライブ

ラリが現れるわけだが、2017年公開の実写版と比較して観るのも面白い。私はこの実写版をととても高く評価しているのは、ハリポタのエマ・ワトソンの素晴らしい成長を同時代人として目の当たりにできた喜びの頭れでもある。

文学の中の図書館については、例えば、澁川 驍の『書庫のキャレル 文学者と図書館』(制作同人社、1997)が好著であるが、その作例の多種多様さに恐れ、なかなか手を出しかねていたが、この春になって名古屋大学大学院人文学研究科の准教授の日比嘉高がようやく「物語が生まれる場所」「図書館文学傑作選」という惹句を付した単著を世に出したので、紹介して、この稿を終えることにするが、まだまだ、「図書館の風景と読書の姿」は、当分続く、魅惑ワールドであることは変わらないだろう。日比嘉高『図書館情調 Library & Librarian』(シリーズ紙礫9)(皓星社、2017)⁽¹⁾(図6)



(図6)

註

(1) キハラ株式会社会長の木原祐輔氏は2010年の第12回図書館サポートフォーラム賞受賞者。

(2) ヘンリー・ペトロスキー Henry Petroski, 1942. アメリカ合衆国の工学者。インターストリアルデザインの研究で知られ、『ゼムクリップから技術の世界が見える』など訳書多数。

(3) カンディダ・ヘーファー Candida Höfer, 1944. ベッヒャー派のドイツ現代写真を代表するアーティスト。

(4) Thames and Hudson, 2005.

(5) アンドレ・ケルテス Andre Kertész, 1894-1985. 20世紀で最も重要な写真家の一人、ハンガリー・ブダペスト生まれ。

(6) 2007年、故藤田嗣治未亡人君代氏より藤田嗣治旧蔵資料約900点が寄贈された。本リストはその寄贈資料一覧である。2011年からは東京国立近代美術館の図書館OPACで検索が可能になっているが、ここにその全リストを公開するものである。すでにこのコレクションを活用して、2012年には、渋谷区立松濤美術館、北海道立近代美術館巡回の「藤田嗣治と愛書都市パリ―花ひらく挿絵本の世紀」展へ多数が出品された」。http://www.momat.go.jp/am/visit/library/LIB/fujita/fujita.htmlより。

(7) Diane Asséo Griliches に於て。University of New Mexico Press, 1996

(8) ウンベルト・エーロ Umberto Eco, 1932-2016. イタリアの記号学者で小説家。修道院図書館が舞台の『薔薇の名前』がよく知られる。

(9) ダニエル・J・フアスティン Daniel Joseph Boorstin, 1914-2004. 歴史家、作家、シカゴ大学教授、アメリカ議会図書館長、『大発見』など訳書多数。

(10) Biblioteca Marciana フィレンツェ、1752年開館、古写本を多く所蔵。

(11) ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882. アメリカ合衆国の詩人。ダンテの「神曲」をアメリカで初めて翻訳。

(12) 漆原宏氏は2015年の第17回図書館サポートフォーラム賞受賞者。2017年、『ぼくは、やっぱり図書館がすき』(日本図書館協会)をさらに刊行している。

(13) 1905-1993. 小説家、文芸評論家。東京帝国大学倫理学科卒。戦前は東大図書館、戦後は国立国会図書館他に長く勤める。同書には「戦時下の東京大学図書館」所収。

(14) http://hibi.hatenadiary.jp/entry/2017/06/02/214355

- (図 1) Candida Höfer. *Libraries*.
(図 2) Andre Kertész. *On Reading*.
(図 3) 林洋子 『藤田福伝 本のくらし』
(図 4) Diane Asséo Griliches. *LIBRARY: The Drama Within*.
(図 5) Biblioteca Marucelliana
(図 6) 日比嘉高 『図書館情調 Library & Librarian』〔ハリー・グ紙巻 6〕

編集後記

「ふおーらむ」14号をお送りします。

元LSF代表の末吉さんが寄稿文で触れられているとおり、図書館サポートフォーラム賞も次回で20回を迎え、節目の回となります。どういった形で迎えるべきか、何か良いアイデアがあれば、事務局までお寄せいただければ幸いです。

遅めの夏休みは以前から行きたかった熊野詣でに参りました。

普通に行くのも面白くないので、高速道路を使わない路線バスとしては、日本最長距離を走行する八木新宮線(全長約167km)を使って、日本一大きな村である十津川村の温泉宿にたどり着きました。狭い山道をフルサイズの車体で走り切るバス運転手の技術には脱帽です。

翌日は熊野本宮大社を目指す数ある熊野古道のうち、修験者の修行ルート「大峯奥駈道(おおみねおくがけみち)」に次ぐ険しさと知られる高野山の修行僧が使っていた「小辺路(こへち)」ルートを使って、果無峠(標高1000m以上。ほとんど登山です)越えの約16kmを走破し、参詣しました。

モデルタイムの6時間半を大きく切ったので、まだまだ体力的に行けるなという変な自負と、翌日の筋肉痛に思わず苦笑いの旅でした。(岩本)

文庫本1000冊を処分して5年が経つ。スペースができたなとほくそ笑んでいたら、いつの間にかそこは生活品のガラクタで一杯になった。処分したのは学生時代から親しんだものだったので、著者名やタイトルで本棚のあそこにあるぞという位置情報があったのだけど、処分してしまうとその情報すらあやふやになる。記憶とは、手触りや香りなどを伴った質感があるものだと思う。その質感が無くなると、記憶も白霧中に散っていく。

今夏、亀山郁夫訳『カラマーズフの兄弟』を読む。学生時代に目を皿にして毎晩毎晩読み耽った岩波文庫の質感は無い。全く異質な世界だった。文庫は無くなっても長い小説ほど好きという別のアプローチからの再読であった。

物が無くなって記憶も消えかけたが、ある光によって記憶が蘇った稀有な例。物が無くなると記憶が失せる。(森本)

ふおーらむ 第14号

2017年9月30日発行

発行人 山崎久道
製作 森本浩介／岩本謙一／尾崎みやま／赤田麻衣子
発行所 図書館サポートフォーラム
〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16
日外アソシエーツ(株)内
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845
http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

